
調停者

風刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

調停者

【Nコード】

N0108J

【作者名】

風刃

【あらすじ】

調停者・・・それはこの世の正義と悪の均衡を保つ者

そんな調停者の家系に生まれた主人公門守真二の冒険の話
序盤は主人公たちが異世界の旅をするという内容です

（自分の書いた文章に納得がいかないので、まことに勝手ながら1、2ヶ月の間休載させていただきまます。申し訳ございません）

プロローグ（前書き）

初投稿です

書きなれるまで更新が不定期になると思います

プロローグ

?年前

場所???

「ここはどこだ？」

「あなたは調停者ちやうていしやに選ばれました」

どこからともなく無機質な声が聞こえてくる。

「誰だ！」

「あなたに力を授けましょう、その代わりにその力でこの世の均衡を保って貰います」

「何を言っている？」

「要するに、善と悪のどちらかにパワーバランスが傾き過ぎないように監視してくださいさねばいいのです」

「その善と悪という物をどうやって判断すればいい」

「あなたの主観で結構です」

「そんなのでいいのか？」

「はい。それではもう質問はないですね」

「まで！断るといったらどうする」

「死んでもらいます」

「……わかった。その調停者とか言つものになってやるつもりじゃないか」

こうして物語は動き出す……

プロローグ（後書き）

注 この男は主人公ではありません

旅立ち

善と悪の均衡を保つ調停者の資格を持つ家系 門守家

そこからまた一人、少年が調停者になるために旅立とうとしていた・

・

場所 自宅

「よし、お金と刀も持ったし、昨日もらった服も着た。これで準備満タンだな」

自宅の裏口の前でブツブツつぶやいているのはこの話の主人公 門かど守もり真二しんじ

身長は173cmで、顔は上の下くらい、運動神経はよく、成績も平均よりは上だった。

「まったく、今度はいつ会えるのかわからないってのに見送りひとつないなんてひどいぜ」

門守家では義務教育を終えると異世界アビトに旅立つことになっている。

そんな簡単に異世界に行けるものなのかと疑問に思うかもしれないが、自宅の裏口が《アビト》の森の中につながっているため門守家の人たちは簡単に行き来することができるのだ。

真二はこの間中学を卒業し、アビトに旅立つことになったのだが、そのとき家族が持つて行っていいと許可したのは、

刀

【刀に認めてもらえないと、本当の力を引き出すのはもちろん鞘から抜くこともできない】

服

【防御力がない代わりに、破損してもすぐ元通りになり汚れることもなく、色やデザインを自由に換えられる】

お金

大銀貨10枚【日本円で10万円程度】

の3つのみで、ほかに必要なものは向こうでそろえろといわれていた。

「さて、それじゃあ出発するか」

その言葉と同時に、真二は扉を開けて1歩踏み出した。

場所 神秘の森

そこには木漏れ日によって明るくさわやかな森が広がっていた。

「ああ、ここにくるのも5、6年ぶりか」

先ほど簡単に世界を行き来できるといったが、なぜか10歳以上のものが世界を渡ると特殊な能力や、普通じゃ持ち得ないような身体能力や特徴を持ってしまふ。そのため、義務教育を終えるまで徹底

的にアビトで生き残るための技術を教え込む門守家では、能力などは訓練の邪魔になると考え、10歳を超えると旅立つ時までアビトとの行き来を禁じられるのだ。

(つと、そんなことよりどんな力が付いたんだ？さつきからなんか感覚が鋭くなったような気がするから身体能力系の何かしらは上がっているんだろうけど・・・まあいいかそのうちわかるだろ。とりあえず今は町まで出なきゃ)

そう思つて歩き始めたが背中になんか違和感があるので見てみると背中から1.5メートルほどの白い翼が生えているではないか

「なんだこれは！というかなんで俺はさつきこれに気付かなかつたんだよ」

そうやって落ち込んでいたものの、気を取り直してその翼がちゃんと動くのか試してみることにした

(この服装じゃ翼が動かせないな、しょうがない変えるか・・・背中に穴・・・背中に穴・・・つと出来た)

いつの間にか服の背中に穴が開いていて、そこから翼が出ていた。

(よし、腕を動かすのとあまり変わらない感覚で動かせるな。じゃあ飛んでみるか)

バツサバツサ フワツツ ゴツツ

翼を羽ばたき浮かんだ瞬間、真二は頭を木にぶつけてしまった

「いってーな、もう少し開けた場所で練習するか」

その後1時間ほど練習し、時速20キロぐらいの速さで、森の中を飛んでもぶつからないぐらいまで成長し、それに満足した真二は森を抜け、町に向かって歩き始めたのだった

旅立ち（後書き）

説明多くてぐだぐだになってしまった

初戦闘それと能力・・・

場所 草原

(このまま街に行くのはいいけどこの姿だと目立ちそうだな・・・
まあ服の下に隠しとけばいいだろ)

アビトでは人間はもちろん、エルフやドワーフ、獣人などといった種族が住んでいるが、その中で翼があるものといったら魔物ぐらいいかないため、その判断は正しいといえるだろう。そもそも真二は幼少期の半分ぐらいをここ(異世界)で過ごしたため、この世界の一般常識ぐらいは持っているのだ。

(このあと街に付いたらギルドにいったら登録しないと、そしてそのあと・・・)

そんな風に考え事をしていたためだろうか、気付くと体長1メートルぐらいでボロボロのぬ腰巻をまとい、錆びた斧や折れた剣などを持った亜人5匹に囲まれていた。その亜人の上には《ゴブリン G》という文字が浮かんでいる。

(これも俺の特殊能力なのか・・・相手の名前がわかるとはまた微妙な能力だな。つかGってなんだ?)

「エ・・・サ・・・エ・・・エサ」

この期に及んでまだ考え事していると、そんなことを言いながらじりじりと近寄ってくる。どうやら腹が減ってるようだ。

わかりやすいように正面から時計回りにゴブリンA、B、C、D、Eと呼ぶことにしよう。

(武器になるものといえばこの使えない刀ぐらいしかないな、抜けても何も無いよりましか……とりあえず囲まれたままじゃまずい、あいつを倒して突破する)

そう思い鞘が付いたままの刀を構え、正面のゴブリンAに向かって駆け出した。

急に近づかれたのに驚いたのがゴブリンAは何もしてこない。

真二はその首に刀を叩き込む。

ザクッ

(え、ザクッ？ 打撃音じゃない？)

そうゴブリンの首は胴体から切り落とされていた。そのことに驚いた真二はつい立ち止まってしまう。

ちなみに殺したということへの罪悪感はほとんどない、命を奪わなければならぬときというものを訓練で経験し、理解しているためである。

仲間が殺された事により怒ったゴブリンB、C、D、E達は一斉に飛び掛ってきた。

(ええい、考えるのは後だ今はこいつらをどうにかしないと)

真二は振り返ると同時にゴブリンEを切りつけ、Bを蹴り飛ばし、そのまましゃがんでCとDの攻撃をかわし、空中にいる二匹の脇に肘鉄をぶち込んだ。

Eが転がっているの方を見て死んでいるのを確認するとまだ痛みで起き上がれないBの元に駆け寄って止めを刺す。
起き上がったことDはそれを見ると一目散に逃げ出そうとしたが、真二は後ろから駆け寄り止めを刺した。

(よし、これで仲間を呼ばれることもない)

死んだ魔物は崩れて砂となり、中から出てきた白い光が真二の中に入っていた。

魔物を殺すとその生命エネルギーを得て身体能力などが強化されるのだ。

(これが親父の言っていた生命エネルギーの吸収か、しかし生命エネルギーは普通見えないはずなんだけどな・・・もしかして普通見えないものなどを見ることができるとのが俺の能力なのか？それならさつき魔物の名前がわかったことも説明できるし、たぶんそうなんだろう)

じゃあさつきの鞘で殴っただけで切れたのはどうしてだろうか？

あれがあの手能力・・・いや、まだ俺の力が認められたとは到底思えない、そもそも使えないって話が嘘だったという可能性もあるが、親父がそんな嘘をつくとは思えない。やはり何かしらの能力だろう。今わかってるのは物に切れ味を付与するといったところか・・・)

おもむろに、地面に落ちていた木の棒を拾ってそこに生えている草に切りつけたが草は切れない

(何かしらの発動条件があるのだろうか？さつきと今の違いといえは・・・斬りつける対象がいること？いやそれだったら今も一応草という対象があるしな・・・力を込めていた？これくらいしか思い

当たらないな)

今度は棒に力を込めてみる・・・すると心なしか棒が光っているようにも見える。そのままの状態で草に斬りつけると今度は草が切れた。

(やっぱりこれだったか！この光をもう少し調べたいところだけど急がないと街に着く前に日が暮れそうだな)

日が暮れたことにあせりながら今度は走って街に向かう真一だった。

初戦闘それと能力・・・(後書き)

まだ主人公しか出てきてない

街へ

場所 商業連合ビジネスピアの首都リビネピア入り口

(何とか日が暮れる前にたどり着いたな)

ここは商業連合ビジネスピアの首都リビネピア、多くの商人たちが集まり大陸中のものが集まるといわれている場所だ。高さ10メートルほどの壁に囲まれていて、中を直接見ることはできないが常に明かりが消えない街である。日が暮れてしまつと門が降りてしまい、翌朝まで誰も入れなくなってしまうため真二は急いでいたのだった。

(しっかし、町並みこそ変わっているものの、にぎやかさは昔と変わらないな)

真二は大通りを歩いているのだが、道の脇には出店や露店が立ち並び、食べ物や日用品、アクセサリ、小物、武器、防具、服、怪しげな薬、宝石などといったいろんなものが売られている。

(そういえば朝から何も食ってないな・・・っお、あれなんか美味そうだな)

きよるきよるとおのぼりさんのように落ち着きがない真二は肉の串焼きを売っている出店に近づいて行った。

「おっちゃんそれいくら?」

「おっちゃん言うな坊主、一串小銅貨7枚だよ」

この世界の貨幣は大金貨、小金貨、大銀貨、小銀貨、大銅貨、小銅貨の6種類あり、全国共通である。小銅貨10枚で大銅貨1枚、大銅貨10枚で小銀貨1枚、といった風に10枚でひとつ上の価値の貨幣1枚に値する。

小銅貨が日本円で10円ほどの価値なので、大金貨などは1枚で100万円に相当することになり、大金である。お金の単位はないため、普通にその貨幣の枚数で商品価格が書かれていたりする。

「じゃあ、6つもらうよ。代金はこれでいい？」

「あいよ、6つだね。代金はしっかり貰ったよ」

「あ、あとさギルドってどこにあるか知ってる？」

「知ってるが、坊主みたいなのがギルドに何の用があるんだ？」

「冒険者登録をするためだよ、これでも腕に自信があるからね」

「へえ・・・意外なもんだな、ギルドはこの街の入り口に入ってますぐ右にあったはずだけど気付かなかったのか？」

「え！そうだったのか気づかなかったなあ・・・おっちゃん教えてくれてありがとう」

「だから俺をおっちゃん呼ぶな！・・・って行っちまいがった。まだおつり渡してないんだけどなあ」

場所 ギルド前

「あ、ほんとだ。こんなところにあるじゃん。何で気づかないかなあ」

そんなことをつぶやきながら入っていく

入ると中には受付が並んでいて市役所などを連想される違うのは利用する人の多くがにごつい人であることか・・・

ギルドは大きな町に1つはあり基本2階建てで、地下がある。

1階には冒険者の登録や依頼の受注や報告、魔物を倒したときに残る素材を買い取る場所などがある

2階には壁で隔られた個室が並び、高ランクの冒険者が依頼を受ける時や話し合いをする時に使われる

地下1階は簡単な食事ができ、いつも冒険者でにぎわっている。

「すみません、冒険者の登録をしたいのですが」

真二は空いている受付に行きそこにいるおねえさんに声をかける。

「ではこの書類を読んでサインをしてください」

そう言われて渡された書類には「死んだとしてもギルドは責任を負わない」などといったことがいくつか書かれてあり、最後に名前を書き入れる場所があった。ちなみになぜ真二がこの世界の文字が書け、言葉をしゃべれるかと言うと、自動翻訳の力などが働いているわけではなく幼少期をここで過ごし、なおかつ親に教えられたからであって、意外と苦労しているのだった。

書類にサインをしてそれをお姉さんに渡す。

「はい、ただいまギルドカードを作っているので少々お待ちください。それともこの間に説明を受けますか？」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

「まず冒険者には力量に合わせたランクというものがあります。ランクにはAからGまであり、それぞれAトリプルキA、ダブルキA、シングルキAのように3つに分かれていて、Aに近く、数が多いほど高くなります。冒険者になったものはランクGから始まり依頼や討伐に応じて高くなっていきます。ここまではよろしいでしょうか？」

「大丈夫です」

「では次に依頼について説明させていただきます。別にどの依頼を受けてもいいですが、依頼によっては何かしらの条件があるものもありますのでご注意ください。一応ギルドの推奨ランクが書かれているのでそれを参考に選ぶといいでしょう。討伐依頼については、討伐したときに残る素材を見せれば倒したことの証明になります。また、難しい依頼や、大規模な依頼についてはギルドのほうから呼びかけることもあります。その場合依頼を拒否すると何かしらのペナルティが付きますのでご注意ください。ほかに細かいことがあります。とりあえずここまで知っていれば大丈夫です。」

「わかりました」

「よくこんな一気にしゃべれるなあ・・・」

事務員らしき人が奥から何かカードみたいな物を持ってきた。

「ちょうどできたようなので最後にこのギルドカードについて説明します。これは名称こそカードですが、実際は情報端末で、持ち主のランクやこれまでこなしてきた依頼、魔物についての情報、現在地などがわかり、なおかつ通信機としての役割をも果たす非常に優

れたものです。紛失された場合は小金貨1枚を再発行料としていただきます。身分証明書としても有効ですのでご利用ください。これで説明を終わりますが、何か質問はありますか？」

「いえ、特にありません。ありがとうございます」

（もう日が暮れてるから、今日は適当に宿を取って依頼を受けるのは明日からにするか）

真一はちょっと安めの宿に泊まって眠りに落ちていった・・・

街へ（後書き）

1週間もあけてすみません
まだ書き方が固まっていないため、不定期更新が続くと思いますが
ご容赦ください
説明が多くなってしまった

依頼

次の日 明け方

場所 ギルド

日が昇る前にギルドの地下1階で朝ごはんを食べた真二は、1階でギルドカードを見ていた。

「うーん、わかってはいたもののランクGで受けられるのは簡単なものや、怪しいランクを問わないものばかりだな。」

昨晩寝る前に真二はギルドカードの取扱説明書を読んで、ギルドカードで今受けられる依頼の一覧が見れることを知ったのだった。実はほとんどの冒険者が説明書を読まないため、この機能を知っているのはあまりいなかったりする。

「お、これなんかよさそうだな」

そうやって真二が選んだのはゴブリン討伐である。

内容は最近夜に村を徘徊し、食料を奪っていくゴブリンを倒して欲しいというものだった。

場所は馬車でも半日かかる距離だったが、飛んでいけば3時間ほどで着くだろうし、確認されている数は8匹程度なので1人でも大丈夫であろう。

（ん？ギルドカードで依頼を受けられるならここに来る意味なかったな・・・）

少し後悔しながら真二はギルドから出て行った・・・

場所 街から少し離れたところ

(よし、ここまで来れば誰にも見られないだろう)

周りを見て誰もいないことを確認すると、翼を広げはばたいた。

(うーん、やっぱり空飛ぶのは気分がいいな。でもこの色だと目立つから飛んでる途中見つかるかもし、どうにかならないか・・・)

そんなことを考えたとたんに翼が透明になった

(な、なんだこれ。この翼変色機能まであったのか・・・便利だなあ)

そんなわけで途中魔物に教われることなく目的の村の近くまでやってきた。

村から1キロほど離れたところに降り立ち、翼をしまつて村に向かって歩き出す。

(よし、このまま村に入って村長さんに挨拶でもするか)

場所 名もない村

着いてみるとそこは家が10件程度しかない荒れた村だった。

(こんなところに人が住んでるのか?)

そう思ったがとりあえず中に入って普通より一回り大きい家に行ってみる。

「すみません、誰かいませんか？」

「お客さんか、そのままはいつていいぞ」

その言葉に従って中に入っていく。

中は意外としっかりしていて、何なのかわからないものや、見たことのない文字で書かれた本が山積みになっていて足の踏み場がほとんどなかった。そんな部屋の中央の椅子にあごひげがたつぷり生え、どこか威厳のある老人が座っていた。

24

「いらつしゃい、一応この集落の長をしているデライという者じゃ。長といってもここにはわし以外誰も住んでいないがな……それで君は？」

「ギルドで依頼を受けてやってきたシンジと申します」

(つてことはこの爺さんの一人暮らしか)

「依頼?……そういえばそんなものもあつたのあ……依頼を出しといてなんなんじゃがすぐにここを離れたほうがよいぞ」

「なんでですか？」

「その依頼を出した頃はゴブリンぐらいしか出てこなかったのじゃ

が、理由はわからないが今じゃゾンビやスケルトン、グール、マミー、オークなどといった奴らまでまで出てくる始末。討伐するどころかこちらがやられるだけじゃぞ」

「わかりました、ご忠告ありがとうございます。しかしあなたは逃げないのでですか？」

（確かにそんなに出てくるなら広範囲攻撃を持ってない俺にはきついな。幸い飛行できる奴がいないみたいだから逃げることは簡単そうだが・・・）

「いや逃げたくても逃げれないのだよ・・・。数日前にこの住人たちが逃がしたときにゾンビの毒にやられてもう体がほとんど動かないんだ。まあどちらにしろここに骨をうずめるつもりだったから変わりはないのだがね」

「そうですか・・・もう死ぬ覚悟はできているのですね・・・何か遺言はありますか？」

（俺の力じゃどうにもならないな・・・ならできるとはやってあげよう）

「そうじゃな・・・。そこにある魔道書を持って行ってはくれぬか。それはかなり貴重なものでここで失わせるのには惜しいからのお・・・もちろん売るなりあげるなりおぬしの自由にしていぞ」

「わかりました」

そういつて言われた本を拾ってデライの方を見ると眼を閉じたまま動かなくなっていた。

「……………冥福を祈ります」

そして真一はその家をあとしたのだった……………1冊の魔道書を持つて……………

依頼（後書き）

話が進まなくてすみません

次回はバトルの予定です

しかしこの調子じゃあ旅の仲間ができるまでどねくらいかかることやら・・・

仇？（前書き）

少し短いです

仇？

場所 名もない村

家を出るとそこはさっきまでとは様子が変わっていた。頭上に暗雲が立ち込め、空気は生ぬるくて気持ち悪い。そしてなによりゾンビやマミー、スケルトンが何体かうろついているのだ。

（な・・・な、なんだこれは。さっきまでとはまるで違うじゃねーか・・・）

あまりの光景に立ちすくんでしまう。すると周りの魔物がいつせいにこちらを向いた。

（げっ、見つかった。逃げないと）

真二は翼を広げて飛び立ち、そのままここから逃げようとするが、何者かが目の前に立ちふさがった。（飛びふさがった？）そいつはフードをかぶり首にしゃれこうべのネックレスをかけた醜いばあさんで、ごつごつした杖を右手に持ち、頭上に《ハッグ EE》と表示されている。

「イーヒツヒツヒツヒ、まさか飛べるとは驚いたよ。だけど久しぶりの獲物だ、逃がしはしないよ」

真二はとっさに刀（鞘に入ったまま）を構え戦闘態勢に入る。すると刀にオーラのようなものが纏わり始める。それと同時に一気に視界が明るくなり、ハッグ（仮）の杖に白い光が集まっているのが見

え始めた。

「お前、何者だ」

（やっぱり戦闘の意志があると能力が発動するのか、で、あの光は何だろうか？）

「ヒツヒツヒツ・・・冥土の土産に教えてやろう。私は人の生き血を啜る魔女さ。お前らみたいな冒険者にはハッグと呼ばれて魔物扱いされているがねえ・・・」

ハッグの杖に集まる光が人の頭ぐらいの大きさになると、集まるのが止まりだんだん赤くなっていく。

「俺を食いに来たのか」

（あの光が何なのかわかるまでうかつに動けないな）

「いや、あんたはついでだよ。この集落に珍しい魔道書があるって聞いたから魔物の群れに襲わせたのさ。最後まで粘っていた奴も死んだみたいだから様子を見に来ればお前がいたって訳。もう気が済んだだろ。あんたには死んでもらうよ【ファイヤーボール火球】」

その言葉とともに杖の先に集まっていた赤い光は頭ぐらいの大きさの火の玉に変わり真二に向かって飛んできた。

（あの光、魔力だったのか！ちっ避けられねえ）

衝撃に備えて腕をクロスにして頭を守る・・・がしかし衝撃はやってこない。不思議に思い顔を上げると火の玉は消えていて、魔力が自分の体に溶け込んでいる光景が眼に映った。

（これも俺の能力か、それともこの服の能力だろうか）

「な、何で魔法が効かない」

ハッグはあまりの予想外な出来事に気が動転しているようで声が震えている。

「誰が教えるか。（本当は分からないんだけど）それよりお前がこの村を襲った主犯格なのか」

やっと真二もさつきハッグが言っていたことを理解し始めたのか、かなり頭にきているようだ。

ハッグは真二に恐怖を覚えたようで体も震え始めている。

「そつ・・・そう・・・だがお前には関係ないだろう」

その返答に対し真二はにらみを入れる。

（こんなやつのでせいでデライさんは死んでしまったのか・・・許せない）

「ああ、確かに関係はないが俺はお前に対して怒りがおさまらねえんだよ。だから・・・死ね」

言葉と同時にハッグに切りかかった。

仇？（後書き）

まだまだ感情や情景が拙いですね
これからも精進しますのでよろしくお願いします

悪魔

ザシユ

ハツグがとつさに回避したため真一の攻撃は服を掠めただけに終わった。

さらに追撃をかけようとするが、なれない空中で武器を振るつたためか体勢を崩してしまい、その間にハツグは地面に降り立ち周りを魔物に囲ませた。その数およそ30。

「ヒツヒツヒヒ、いくらなんでもこの数相手に一人で立ち向かえまい」

ハツグは自分の周りを味方が囲んだことで心の余裕を取り戻したようだ。

（ちっ、確かにあんなにいたら手の出しようがない。撤退するしかないのか？）

不利な状況に熱くなった頭が冷えてくる。そして気付く

（さっきはなんか熱くなってたけど、よく考えたらデライさんの仇討ちをする理由なんてないな・・・確かにあの魔物はむかつくんだけど、この状況で無理して挑んだらこちらの身が危ういからな。何でさっきは熱くなってたんだろ？）

「どうした、怖気づいたのか。そうだよなあ、どうせさっきの魔法を消したのも魔力障壁でも張ってたんだろ・・・今あたしは力がみ

なぎっているんだ負ける気はしないね【ファイヤーボール火球】」

(なんかあいつ、黒い霧みたいなの取り込んでるよ・・・それよりいつのまにかこちら一帯が黒い霧に覆われてる事が原因なのか？俺もなんだか力がみなぎってきてるしな)

ファイヤーボール
火球をかわしつつ(さっき魔法を無効化したのがどういう能力なのか分からないため)、そんな疑問を真二は感じる。

このまま逃げようとしても魔法で牽制されるため逃げられず空中でかわしながら今の状況を理解しようと考える。

しばらくはこの拮抗状態が続くかと思われたが、

変化は 唐突に 訪れる

全てのものが色褪せ、動きを止め、音ひとつ聞こえなくなる。もちろん真二も動かなくなり、無機質な声が頭に響く。

「あなたがこの世界に来てからちょうど1日だったので通例に従って能力の解説を行います」

(つく、声が出せない。この声、何者なんだ?)

「別に声を出さなくても頭に思い浮かべるだけでこちらに通じます。何か言いたいことがあるのですか?」

(だからお前は何者だ)

真二は見をひるがえしこの場から逃げようとする。

これ幸いとハッグは魔法を放ってくるが、真二に当たると同時に霧散してしまう。

それでも懲りずに撃ってきたが真二が魔法の射程圏内から抜け出したことであきらめたようだ。

「まあいい、これで私を邪魔す

」

このときハッグが何を言おうとしていたのかこの先誰も知ることはないだろう。

なぜならちようどそのときハッグの足元に冥界につながるゲートが開き、そこから吹き出た炎によって灰になったからだ。それと同時に周りにいた魔物も生み出した術者が死んだせいか崩れ落ちる。

「やばい、もうきたのか」

真二は逃げるのをあきらめ戦闘体制に入る。

そしていまだに炎を噴出し続けているゲートに人影がみえた。

中から出てきたのは

黒い翼にいかにも悪魔らしい黒い尻尾、真紅の髪と瞳を持つ14歳ぐらいに見える、少女だった。

真二は驚きのあまり固まってしまった。

(あ、あれが悪魔あ！もっとごつくてグロいもんだと…)

「よし、着いたみたいね。で、ここはどこなのかな？……あっ

悪魔の少女は、こちらに気付いたようでごちらに飛んでくる。それを見て真二もあわてて構えようとするが、

「すみませーん、突然ですけど私と契約を結んでくれませんか？」

この言葉にまた固まってしまった。

「はい？いまなんと」

「私と契約結んでくれませんか？私、この世界の観光に来たんですけど、まだ弱いので魔力の供給がないとあまり長くこの世界に居れないんですよ。魔力を持つ生き物を倒しても魔力が手に入りますけど効率が悪いので、契約して魔力もらったほうが楽なんです…だめですか？」

「いや、そんな急に言われても…契約って何ですか」

（嘘はついてないみたいだし、特に損がないなら契約してもいいかな？かわいい子の頼みは断りづらいし）

真二は《魔眼》の能力で嘘を見抜くことができるのだ。

「えっと…結んで欲しい契約は対等関係の契約で、あなたの魔力を私が貰う代わりに私があるに協力するってものです。」

「魔力を君にあげることで俺が死んだりする可能性はあるの？」

「そんなことにはなりませんよ。基本的に渡す魔力の量はそちらで決められますんで」

「契約の破棄は？」

「お互いの合意があればいつでもできます」

「よし、わかった。契約しよう。」

「ほんとですか。ありがとうございます。じゃあ右手を出してください」

真二が右手を出すと悪魔の少女が同じく右手で握った。

（誰かの手を握るのも久しぶりだな…それもかなりかわいい子…感慨深いな）

「じゃあ私が言ったことを聞いて適当にかえしてください。」我ここに誓う 汝に協力せんことを」

（適当って言われても困るんだけどなあ）

「我ここに誓う 汝に魔力を与えんと」

「我ここに再度誓う リリアーナ・レ・ヴァルセリア・イフリートの名に懸けて」

（ああ、そういえば名前聞いてなかったな、リリアーナって言うのか）

「我ここに再度誓う シンジ・カドモリの名に懸けて」

(あ、何を言えはいいのか頭に浮かんできた)

「我汝の名を預かり契約を結ばん」

悪魔（後書き）

とりあえずようやくほかのキャラが出せました。

能力の説明はおいおいするんでもう少しお待ちください。

まだまだ文章能力が低いですので何かご指摘があったらぜひよろしく願います

契約の作用（前書き）

主人公の能力の詳しい説明はもうしばらくお待ちください

契約の作用

「我汝の名を預かり契約を結ばん」

言葉を言い終わると同時に真一を緑の光、リリアーナは赤い光に包まれ、結ばれている右手に混ざりながら集まっていく。

そして全てが集まりきると、二人の手の甲に流れ込むようにして消えた。

手を離し一息つく。

「はあく契約が成功した」

リリアーナは契約が成功したのがよほど嬉しいのか、満面の笑みとともにそんな言葉をはいた。

「成功？失敗することもあるのか？」

「うん、あるよ。2人の相性が悪かったり、どちらかが相手に対して悪い感情を持ってたりすると失敗するんだって。まあ失敗しても害はないから説明しなかったけど、言っといいたほうがよかった？」

「いや、別に害がないんだったら気にしないが・・・口調が変わってるぞ」

「ああこれはこっちが素。契約するまでは極力相手に悪い印象を与えないよう敬語で話してただけ。」

敬語のほうがいいんだったら変えるけど？」

「ふーん、そんなもんなのか。まあ俺はそういうの気にしないから、そのまま構わんけどな。」

「そういえば自己紹介が遅れたな。俺は門守真二かどもりしんじ門守が姓で、真二が名だ。呼び方は好きにしてくれ。」

（なら、俺も言葉遣いは気にしなくてもいいか）

「私の名前はリリアーナ、本当はもう少し長いけど、フルネームは契約みたいに重要なときしか名乗らないことにしてるの。気軽にリアって呼んで。シンジじゃ呼びにくいからシンって呼ぶことにするわ。これから宜しく」

「こちらこそ宜しく。それでほかに契約について言っていないことはないよな」

「えっ、ちょっと待って今確認するから…」

リアはそう言つと、どこからか『契約簡単ガイドブック』と書かれた本を取り出す。

（おいおい、なんだよそれ）

「えっと対等関係の契約についてと、

『対等関係の契約とは悪魔と契約者対等の関係のまま契約するもので、契約の際に誓ったこと以外には強制力が働かない。この契約をしたものは互いに5感を共有することができ、常に相手の位置が分かるようになる。また、お互いの技や能力の一部を扱えるようになる、2人の友好度が極端に高ければ《シンクロ》することができ

』

だつてさ。これで分かった？」

「いや、分かったもなにも初めて聞いたことばっかじゃねえーか。害はないみたいだけどこういうことは事前に説明しとけよ！」

「そんなこと言つたつて私も今読んではじめて知つたんだからしょうがないじゃない！」

「知らないで契約するとかお前正気か！？危険なものだつたらどうするつもりだつたんだよ」

（本当に信じられん、こいつバカか？）

「安全かどうかぐらい確認してたわよ！それに問題なかつたんだから別にいいでしょ」

「はあ…もういい、きりがないからこの話はもう終わりだ。それでお前どんな能力があるんだ？自分が使えるようになったものは確認しときたい」

「なによその言い方、まるで私が悪いみたいじゃない……………私は火を操ることができるわ。まだ生まれてそんなにたつてないから大した量は操れないんだけどね。シンにも何か能力つてあるの？」

「ああ、大気を操る能力があるらしいけど、まだろくに操れない。で、火を操るときのイメージってどんな感じだ？」

（あの声も能力の説明だけじゃなくて使うときのこつも教えてくれりゃーいいものを…）

「ちよつと集中して周りから火をかき集めるようなイメージをすれば火が出てくるから後は思ったとおりに動かせるはずよ」

「わかった。やってみる」

真二は目を閉じて右手を前に出す。

(周りの火が俺の手の上に集まるイメージで…)

眼を開けると真二の右手の上には拳大の火の玉が浮いていた。

今度はそれを飛ばしてみると、5メートルくらい先まで飛ばしたところで動きを制御できなくなった。

「おお、出来た。けどあんまり遠くまで飛ばせないな。まだ実践では使えそうにないか」

「まあたしかにそれじゃあね…私はこれを半径100メートルくらいの中でなら自由自在に操れるわ」

そういつてリアが出したのは直径1メートルくらいの大きな火球であった。

「うわあーこの契約で使えるのは本当に相手の能力の一部でしかないんだな…当分俺たちには関係なさそうな効果だ。じゃあ五感の共有はどうだ？俺には何も感じられないんだが」

「私も特に何も感じないわね…まあそのうち分かるでしょ！もう暗くなってきたしとりあえず町まで案内してよ」

「いいけど、ここをこのまま放置していいのか？」

そうもともと集落があった場所はハッグの放った火球や、リアが出たときファイヤーボールに吹き出てきた火によって焼け野原になってまだ所々火がついていた。このまま森に燃え移らなければ奇跡的である。

「まああれくらいの量なら大丈夫かな…シン、見てなさい」
「フレイム【集炎】」

リアがそう唱えるとそこから燻っていた火がリアの頭上に集まっていく。

「クリア【消炎】」

続いてそう唱えるとその火が跡形もなく消えた。

「すげーな、けど言葉を唱える必要ってあるのか？」

「言葉を唱えたほうがイメージがわかりやすいの、確か魔法とかも同じ様な感じのはずよ」

「ふーんそうなのか、そろそろ街に行くか」

「そうね、あー初めての異世界の町楽しみだわ」

2人はそのまま町の方へ飛んでいったのだった。

契約の作用（後書き）

話がぜんぜん進みませんね

今のところ週1更新ぐらいになってます。

最低でもこのペースを保てるようにがんばります

目標は週2回更新です。

この駄文を読んでくれる人はこれからもよろしくお願いします

能力について(前書き)

更新遅くなっています

毎週土日には更新できるようがんばります

能力について

場所 リビネピアへ向かう途中の上空

「そういえばシンって、どうやって飛んでるの？」

単調な景色に飽きてきたのか、街に向かい始めて2時間ほど経過した時、リアがそんなことを尋ねてきた。

「ああそういえば見せてなかったな。見えないようにしてるだけで俺にも翼があるんだよ。ほら、」

そういつて翼の色を透明から黒に変えてやる。

白にしなかったのは暗くなり始めたこの空じゃ目立つからだ。

「ええ！なんで、シンって人間でしょ？何で翼なんて持ってるの？」

リアがとても驚いて飛ぶのを忘れて下に落ちていった。

俺が普通じゃないことに今頃気付いたらしい。普通人間は大気を操れないんだが…

「ああ、俺はちょっと特殊な体質の持ち主でな、他にも普通の人は違うところがあるんだよ。詳しいことは、時間があるときに教えてやるよ」

とは言ったものの正直なところしばらくは自分の能力のことを誰にも言いつもりはない。

理由は2つある

1つはまだ自分でどれくらい能力を使えるのか分からないからだ。

あの声が説明してくれたのは

《翼は色だけでなく、大きさや形、材質、属性までも変えられる。

魔眼は普通じゃ見えないものも見ることができ、解析することができる。

斬気とは闘気の種類で断つことに特化している。

魔力自動吸収はその名の通り自動的に触れた魔力を吸収する体質。

エアマスターとは大気を操ることができる能力である。

これらは使い慣れれば慣れるほど威力や効果が増す》

という大雑把な概念のみで、魔力や闘気について詳しく知らない俺にはよく分からないものだった。自分でもよく分かってないものを他人に説明しようとは思わない。

もうひとつの理由はこの能力のことが広まるといろいろと厄介なことになるだろうからだ。

特に研究者や国などに研究されたり、戦力とするため自由を奪われたりしそうだ。

まあリアならそういったこともないだろうが、話しているところを誰かに聞かれたりするかもしれないので、狙われても自力でどうにか出来るようになるまでは、ばれないよう念には念を入れておきたい。

「ふうん、まあ要するにシンは人間だけど人間じゃないってことね」

驚きから立ち直ったのか、リアがまた上空に戻ってくる。

「何が言いたいのかよく分からないが、まあそんなところだ」

たぶんリアはよく分からなかったのだろう…

~~~~~

そうやってリアと話しているうちにリビネピアに到着した。

「あ、そうそうリア、中に入る前にこれを着てくれ」

そういつて今着ている服と同じ機能を持つ服を差し出す。旅立つ前に服の予備も貰っていたのだ。

「なんで？」

「悪魔つてあんまりいい印象で見られないし下手したら問答無用で攻撃されるかもしれないから、この服で翼と尻尾を隠さないとまずい。あと能力も使わないようにしろよ！」

ついでに服の使い方も教える。

「わかったけど、そんなに悪魔つて嫌われてるの？」

そついいながらリアは服をフード付きのローブにしてかぶる。

「まあ悪魔つて言ったら災いを招くといった印象しかないからな。

俺はよく知らないけど」

その後特に怪しまれることなく街に入ることができ、（この世界ではフードをかぶって旅する人が意外と多いため怪しまれない）日も暮れて暗くなっていたので飯を適当に食い、そのまま昨日と同じ宿に泊まって寝ることになった。

部屋はもちろん2部屋とった。女の子との相部屋なんて心が休まるわけがない…

## 能力について（後書き）

少し短かったし、無理やり説明を入れ込んだ感が…  
何かおかしなところがあつたらご指摘ください

ちなみに魔道書は服の形を変え、いれてあります

能力の使い方？（前書き）

真一視点

## 能力の使い方？

次の日：

朝早くからまたギルドに行った。リアをギルドに登録するためだ。

昨日の依頼は依頼主が亡くなったため無効だった。

そのままスライム討伐の依頼を受ける。

場所は町から3時間ほど飛んだところにある洞窟

スライムつてのはFランクのゲル状のモンスターで、物理攻撃が通じない。その代わり物理攻撃以外に

はとことん弱いので、魔法などが使えれば簡単に倒せる。

そうはいつでも魔法が使えるものは余りいないので、報酬が大銀貨5枚と高報酬である。

俺だけじゃ倒せる気がしないが、火が使えるリアがいるから余裕だ。

リアにやっってもらっている間に自分の能力の確認もできるだろう…

## 4 時間後洞窟前にて

「リア、ここがスライムが大量にいる洞窟だそうさ。がんばってき  
てくれ。」

「え、シンも一緒に行くんじゃないの？」

「何言ってるんだよ、物理攻撃しかできない俺が役に立つわけないだ  
ろ、むしろ足手まといになる。だから一人でがんばってきてくれ、  
俺はこっら辺で適当に魔物と戦いながら待ってるから、よろしく頼  
んだぞ」

「それもそっか、だけど何で魔物と戦いながら待つのか？」

「魔物の討伐依頼を後で受ければ、お金になるからだよ。お前の分  
の生活費もあるからあんまり金に余裕がないんだ。できるだけ効率  
よく稼がないとな」

「ごめん、じゃあ行くからシンもがんばってね」

そういつてリアは洞窟に入ってしまった。

まあ、金がないのは本当だけど分かれて行動する1番の理由は、誰  
にも見られないで自分の能力の確認をしたいからなんだけどな

さて、まずは『魔眼』を使ってみるか…

眼に意識を持っていく、するとこの前見た光(たぶん魔力だと思っ  
た)がみえる。

そしてそのまま遠くを見ようとするとどんどん頭が痛くなっていく。

10kmくらい先まで見えたところで痛みがひどくなり元の視力に戻す。

しばらくそのまま休み、痛みが引いたところで今度は一度にどれくらい見えるのか試すことにする

こちらも範囲を広げようとすると頭に痛みが走り、半径500メートルぐらいを一度に見るのが限界だった。戦いながら使うのも考えると、半径100メートルが限界だろう。

ついでに今視界を広げたおかげで300メートルほど先にゴーレムがいるのが見えた。

ちよつどいい…能力の実験台になってもらうか………

翼を最大にし、それを動かし高速でゴーレムに接近し、そのまま刀（鞘つき）に斬気をまとわせ振り下ろす。

それだけでゴーレムは真っ二つに切り裂かれ、崩れ落ちた。

この能力で1対1で相手に物理攻撃が効く場合、負ける要素がほとんどないな…

魔眼で相手に気づかれる前に捕捉し、空からの奇襲で先手を取り、1撃で倒す。

ゴーレムの生命エネルギーを吸いながらこれからの方針を考える。大気を操ることに関してはまだぜんぜん感覚がつかめないが、それはそのうちできるようになるだろう

今はリアが戻ってくるまでにできる限り3つの能力を使いこなせる

よようになるのが先決だ。

そして真一はその後20体ほどD、Eランクあたりの魔物を倒した。

## 能力の使い方？（後書き）

まだ少し納得いかないが、とりあえず書けた。  
本当に自分の表現力不足を残念に思う。  
次回はリア視点にできるといいなあ…

## ミノタウロス（前書き）

初のリア視点？です

## ミノタウロス

視点リア

シンと分かれて洞窟に入っていくと、暗くて何も見えなくなってきたので火の玉で周りを照らす…が、すぐ消した。信じたくない光景が見えたからだ。

しかしいつまでも暗いままでは意味がないので、もう一度火の玉を出して周りを照らす。  
やっぱり見間違いないじゃなかった…

壁一面にへばりつくスライムの数々…めちゃくちゃ気持ち悪い。正直このまま帰りたいたい。  
でもこのまま帰るわけにも行かないし、しょうがないからさっさと終わらせよ…

「消えてなくなれ！【炎波】」  
ウェーブ

私の前に炎の波が現れ、スライムを焼き尽くす。とりあえず見える範囲にはスライムがいなくなったとともに、生命エネルギーが吸収される。いくら雑魚だといってもかなりの数が居たためか量が多い。

さすがに一回じゃ奥までは届かないから、ある程度進んでは攻撃を  
してまた進む、を繰り返す。

そうこうしているととても開けた場所に出た。そこにはたくさんのスライムとともに予想外の魔物がいた。

上半身が雄牛で下半身が人間の魔物…通称ミノタウロス…：克蘭ク…：タフさと魔法耐性が高いことが売りのかなりの強敵だ。

そんな魔物と遭遇する自分の運の悪さに若干絶望していると、棍棒を振り回しながらミノタウロスがこちらに突っ込んできた。

っていつかなんであんなにいきり立ってんのよ！

「ぶおおおおおおおおお…」

ミノタウロスの渾身の一撃をぎりぎり避け、その結果棍棒によって床が陥没した。

「なんて馬鹿力…一撃たりとも食らうわけには行かないみたいね」

ミノタウロスの力に肝を冷やしたけど、相手が体勢を立て直す前に後ろに回りこみ、

「これでもくらえ、メガフレイム【大炎球】」

直径5メートルほどの炎でできた球体を叩きつけた。

そのままバックステップで距離をとり、炎の中を見つめ警戒する。

ミノタウロスは燃え盛る豪炎の中で崩れ落ち、それを見たりアは炎

を霧散させる。

「案外あっけなかったわね…ん？外傷はないみたいだし何でぶっ倒れたのかしら？」

リアは気付いてないが、度重なる炎の使用により、洞窟内の酸素はほとんど無くなっていて酸欠でミノタウロスは倒れたのであった。魔物は体のほとんどが魔力でできているため、酸素がなくても魔力さえあれば生きていけるのだが、それは高位の魔物の話であってミノタウロスぐらいでは酸素が無くなると死にこそしないものの仮死状態に陥ってしまうのだ。

「まあいつか、とりあえず止めをさしとこ…我が元に来たれ【炎魔混槍】」

目の前に炎で描かれた魔法陣が現れ、そこから一本の真紅の槍が出てくる。

触れるもののエネルギーを炎に変えるという呪われた槍。その特性上、炎属性の種族しか持つことが許されないものだ。

そんな槍をいまだ倒れたままであるミノタウロスに向け、

「こんなところで私と戦うことになるなんてあんたは運が悪かったみたいね。まあ、どうでもいいか」

ミノタウロスに突き刺した。

ミノタウロスは瞬時に炎となり跡形もなく消えたのだった…

## ミノタウロス（後書き）

く視点といいながらキャラの視点にできてない…

またまたミノタウロス（真二視点）（前書き）

2週間もあけてすいませんでした。

先週は旅行に行っていて更新ができず……って言い訳ですよ

しかし更新を停止させる気はさらさらないのでどうか見捨てないで  
ください

では本編をどうぞ

## またまたミノタウロス（真二視点）

### 真二視点

魔物狩りを切り上げた俺は洞窟の前でリアが出てくるのを待っていた。

洞窟の前で待つてないで中まで迎えにいつてやるつかとも思ったが、洞窟の様子を見てあきらめた。

なぜか洞窟の壁が解けたあとがあり、中からすごい勢いで熱風が吹き出ているからだ。

こんな中で俺が生きていられるわけがない。

しょうがないので魔眼を使って洞窟内の様子を見ることにする。

すると…リアが牛頭の魔物《ミノタウロス CCC》に追いかけていた。

リアは体や翼から炎を出しジェット機のようにして高速で低空飛行をしているようだ、ぜんぜんミノタウロスと距離が離せていない。リアはかなり速いのだが、いかにせんミノタウロスが速すぎるのだ。

（シン！聞こえる？聞こえてるんなら返事して）

急に頭の中にリアの音が響く、当たり前だが近くにリアはいない。

（ん？なんだ、空耳か…）

（勝手に空耳扱いたないで！私よ私、念話であんたに話しかけてんの）

（へ〜そんな方法があんのか。で、何でミノタウロスなんか追われてんだ？）

（何であんたがそのことを知ってんの？ってそんなことはどうでもいいから、後1、2分で私に続いてミノタウロスが出て行くと思うから、その時ミノタウロスにおもいつきし攻撃して。）

（わかった。おまえは絶対に速度を下げるなよ。そうしないと攻撃に巻き込むかもしれない）

（OK！頼んだわよ）

念話を終えて、刀に斬気を纏わせ始める。この状態ならミノタウロスを切り裂くことは可能だろう。だがこの長さではあの巨体に決定打を与えるには短いだろう。

ならば……………伸ばす

いつもより多めに纏わせた斬気を刀から伸ばしていき、2.5mほどになった。

これは3体のゴーレムに囲まれたとき、一度に倒すことができないかと考え、編み出した技だった。

【断刀・太刀風】

斬気を刀だけでなく空気にも纏わせる技。しかしまだ斬気の制御が甘いため、簡単な形で自分が持っているものに付け加えるような形でなければ使えず制限時間も3分と、まだ未完成だ。しかし切れ味に不足はない。

リアとミノタウロスが出てくるまで後1分ほどのようだな…

洞窟の出口の上で構えて、出てくるのを待つ。するとまたリアから  
念話が届く。

(シン、出る瞬間をカウントするから合わせて！ 3…2…1…  
…0)

カウントが終わると同時に炎に包まれたリアが洞窟から飛び出し、  
間を空けずにミノタウロスが出てきた。そこに構えていた太刀風を  
振り下ろす。

しかし敵もさすがはCCCランクトリプルというべきか、こちらの攻撃に気  
づいたようで身をひねって回避しようとする。そのため本来なら真  
っ二つにするはずだったのが左肩から先を切り倒すだけで終わって  
しまった。

ミノタウロスは左肩を切り落とされたにも関わらず、右手でこちら  
を殴りつけようとして腕を振るってきたため、追撃をあきらめ、リアが  
いるところまで上昇しながら下がる。

「リア、攻撃したけどどうするつもりなんだ？いくら片方の肩を切  
り落としたからといって一筋縄でいくような相手じゃないぞ。幸い  
飛べないみたいだしこのまま逃げるって手もあるが？」

「なに言ってるんの、そんな弱気な事言っただけから自分より強いや  
つと戦ったとき瞬殺されるわよ。」

だから強くなるためにも戦うに決まってるでしょ。」  
言いながらリアは手に炎で槍を作り出す。

「わかったよ。聞いたただだからそうカッコすんな。俺も強くなり  
たいしな」

「ついでリア&シンvsミノタウロスの戦いが始まった

またまたミノタウロス（真二視点）（後書き）

戦闘に入りました。

いろいろと疑問があるかもしれませんが、それは次回で判明すると思いますので見逃してください。  
これからもよろしく願います

またまたミノタウロス（リア視点）（前書き）

更新遅れてすいません

今試験期間中なので来週も遅れるかもしれません

稚拙な文章ですがこれからもよろしく願います

## またまたミノタウロス（リア視点）

時間は少しさかのぼる

### 【リア視点】

今日の私は本当についてない。

二人でスライムの討伐にきたはずなのに結局私一人でやる羽目になり、

スライムを討伐していたらミノタウロスに遭遇して戦闘になり、きわめつけはミノタウロスを倒した後、戻ろうと振り返るとそこに今倒したのより二周りほど大きいミノタウロスがいたことだ。

「何でこうついてないの！」

そのミノタウロスは狩に行っていたのか、なにやら動物の死骸を引きずっている。そしてそのまま…

私に向かって突進してきた！ってまたこのパターン？！

いい加減飽き飽きしながらもその突進を避け「ヴウオオオオオオ」  
きれず足がミノタウロスに掠り、吹っ飛ばされる。

いったく、掠っただけだから吹っ飛ばされるだけですんだけど、さっきの奴より能力が全体的に上回っているみたい。これはさっき止めに炎魔混槍を使ったのはミスだったかな？そのせいであんま魔力が残ってない。

逃げるしかないな

「隠せ！【炎幕】」  
カーテン

炎でできた薄い幕を幾重にもミノタウロスの周りに出現させる。これで相手の目を誤魔化せてるうちにこの場を離れないと…

足にダメージを負ったため、低く飛びながら逃走するが、狭い通路に入ったところでミノタウロスが炎を振り切り追いかけ始める。このままじゃ追いつかれるのも時間の問題ね、正直制御に不安があるけどアレを使うしかない！

「【炎爆】」  
バースト

体の一部を炎に変換し、それを爆発させ高い推進力を得る技だが、それゆえコントロールも難しい。一步ミスれば壁に叩きつけられてしまう。狭いここではなおさらだ。

加速したおかげでミノタウロスに距離を詰められることはなくなつたが、この様子だと洞窟を出たあと追っつきそう…そんなことになつたら町にまで被害が及ぶし、何より私の体力が持たない。人に頼るのはあんまり好きじゃないけどシンに助けてもらおう

（シン！聞こえる？聞こえてるんなら返事して）

念話でシンに呼びかける。が…

（ん？なんだ、空耳か…）

とか言つて私に気付いてないみたい

（勝手に空耳扱いしないで！私よ私、念話であんたに話しかけてんの）

（へ～そんな方法があんのか。で、何でミノタウロスなんか追われてんだ？）

こんな時になんてのんきな。というか…

(何であんたがそのことを知ってるの？ってそんなことはどうでもいいから、後1、2分で私に続いてミノタウロスが出て行くと思うから、その時ミノタウロスにおもいつきし攻撃して。)

そうそうそんなことは後でゆっくりと聞かせてもらえばいいし(わかった。おまえは絶対に速度を下げるなよ。そうしないと攻撃に巻き込むかもしれない)

(OK!頼んだわよ)

意外とあっさり納得してくれたなあ？

それに巻き込むってどんな攻撃するつもりなんだろう？

まあそれも出れば分かるか。今は追いつかれないように集中しよう

~~~~~

少しすると出口の光が見えてきた。

シンが攻撃しやすいようタイミングを教えよ

(シン、出る瞬間をカウントするから合わせて！ 3…2…1…

…0)

カウントが終わった瞬間洞窟を出て周りが急に明るくなった。

そしてすぐ後ろにあったミノタウロスの気配が離れたため、【炎爆^{バースト}】

を解除して振り返る。するとそこには左の肩から先が無くなったミ

ノタウロスと、強いエネルギーを出している鞘つきの刀を握るシン

が、こちらに飛んできた。

あのミノタウロスの肩を切り落としたことに感心していると

「リア、攻撃したけどどうするつもりなんだ？いくら片方の肩を切り落としたからといって一筋縄でいくような相手じゃないぞ。幸い飛べないみたいだしこのまま逃げるって手もあるが？」

と、かなり情けないことを言ってくる。確かに言ってることは正論

「ただ、相手が飛べないからといって逃げ切れるとは限らないし、なにより」

「なに言ってるの、そんな弱気な事言ってるこれから自分より強いやつと戦ったとき瞬殺されるわよ。」

「だから強くなるためにも戦うに決まってるでしょ。」

「これは強くなるチャンスだ。シンに言ってるじゃないけど、この世界に来たのは観光のためだけじゃなくて強くなるための武者修行の意味もある。」

「右手に炎を集め、槍の形にする。炎の固まりだから相手の攻撃を受けけることはできないけど今回の場合、力の差が激しすぎて受け止められないから関係ない。」

「わかったよ。聞いただけだからそうカッコすんな。俺も強くなりたいたいな」

「心も覚悟を決めたようだし始めますか！」

やっと依頼完了(前書き)

更新遅くなり、すいませんでした。

やっと期末考査も終わり冬休みに入ります。

その間だけでも更新速度を上げられないかなあと考えている次第です。

では拙い文ですが、本編を…

やっと依頼完了

【真二視点】

つい調子のいいことを言ってしまったけど、どうやって倒そう…
魔眼で見た感じ、あの皮膚は直接攻撃以外のダメージをかなり軽減させるようだ。

まだ太刀風を維持できているがその時間も残りわずか、後一撃当てるのが精一杯だろう。

そもそもこうして考えている時間ももつたいないのだ

「とりあえず仕掛けるか、リアは切り取った肩口から攻めてくれ。」

そういつて地面に降り立ち、駆け出す。もちろん飛んだほうが速いのだが、まだ飛行になれないため小回りが効かず、ミノタウロスのような強力な魔物相手では攻撃を避けきれない。それに翼をうまく使えば地上でも加速したり、空気抵抗によって急ブレーキをすることが可能だ。

向こうもこっちが降りてきたのを見て寄ってくるが、さっきのような突進ではなく、こちらの出方を伺っているようだ。

もうすこしで太刀風の射程範囲に入りそうになったとき、ミノタウロスが残っている右手を振るい地面を削るように殴りつけた。地面がミノタウロスの馬鹿力で殴られたせいではじけ、こちらに向かつて土砂が飛んでくる。

俺はとつさに強度ができるだけ上がるようにイメージした翼で防ぎ、色を透明にして前方を確認すると、すでにミノタウロスは近くに来ていて俺に一撃を加えようと腕を振りかぶっている。

(やばい！俺がアレくらったら一撃で落とされる)

瞬時に翼を振るいその力を使って下がろうとするが、

「気にせず攻撃して！！」

というリアの声が聞こえてきたため、その力を使ってさらに接近し、そこに真横からミノタウロスの腕が襲い掛かる…が、

「ハッ！」

リアが腕が無くなり剥き出しになった肉に炎の槍をたたきつけ、痛みのためかミノタウロスの攻撃がぶれた。

その隙に俺は懐にもぐりこみ、太刀風を振るう。

スパッ

ズルッ

ミノタウロスは胴体を斜めに分断され、上半身が横にずれ落ちた。そして時間切れによって太刀風が解除される。

それを見た瞬間今まで張られていた緊張の糸が切れ、座り込んでしまふ。ここまで明確に死を感じたのはこの世界に来てから初めてであつたため緊張していたのだ。

「シン、まだあいつの生死を確認してないのに休憩しないでよ。魔物と戦うときは相手が崩れ落ちるまでは気を抜かないのは常識。今回は大丈夫みただけで相手によっちゃ真っ二つになっても動く奴とかいるんだから今度から気をつけて。」

リアはミノタウロスが崩れ落ちるのを見ながらこちらにそう言って

くる。

分かってはいるがこの世界で自分より強い奴と戦うのは初めてなのだから見逃して欲しいものだ。

しかし言っていることは正しいので、素直に謝るか。

「ああ、すまん。二度とこんな醜態はさらさないようにするよ。」

この戦いをもってして予想よりはるかに難しかった依頼は終わったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0108j/>

調停者

2010年10月15日01時21分発行